

(添付資料1)

最優秀賞
文部科学大臣奨励賞



五人そろって家族
岩手県岩泉町立小川中学校
三年 八 幡 大 介

「ファー。もう八時半か。おきるか。」

一月十日、中学一年の冬休み。いつもとかわらない朝だった。居間では父が朝ごはんを食べていた。ぼくが牛乳を飲んでしていると、父が「俺は脳梗塞かもしれない。口もとがおかしい。」と言い、自分で車を運転して病院へ向かった。ぼくは、「まさかお父さんが、なるわけないよな。」と思っていたが三十分後、電話がなって、祖母が受話器をとった。そして、一言二言しゃべって受話器を置き、泣きくずれた。

「お父さん、あたってんだって。もう稼げねえんだって……。」
と言った。

「うそ。本当に……。」

ショックだった。まさか父親が脳梗塞になるなんて……。

それからはとにかく行ける日は毎日お見舞いに行った。

そして、二週間おきに、三日ほどは家に帰って来られるようになった。ぼくはいつもその三日間が待ち遠しかった。

一度だけ、父の友達と一緒にお見舞いに行った。

「今まで働きすぎたんだ。あせってたってしかたがない。ゆっくり治せばまた働けんだから。がんばれ。」

その友人の言葉に、父は涙を見せた。僕が生まれて初めてみた父の涙だった。その涙はぼくの心にしみてきた。そして、やっぱり友達はいいものだなあとつくづく思った。

やがて、父は病院からリハビリセンターに移った。リハビリセンターは遠かったのも、お見舞いに行く回数が極端に減った。父もなかなか帰って来られないのでぼくはさびしかった。しかし、妹とぼくはできるだけそれを表に出さないようにしていた。なぜなら、母も祖母もさびしいのは同じだと思ったからだ。よけいな心配をかけたくなかった。

学校に行けば友達もいるから楽しいが、家に帰っても、どこかさびしく、心にすきま風がふいている感じがした。

おこるとこわいけれど、楽しい父親がいないのがこんなにさびしいとは思わなかった。

そして、待ちに待った、月に一度の帰宅日が来た。母は鼻歌を歌いながらごはんを作り、ぼくと妹はうれしくて、自然に笑顔になっていた。

その日の晩ごはんは本当に楽しかった。うちで一番涙もろい祖母も、うれし涙をこらえながら、笑ってごはんを食べていた。久々にごはんがおいしかった。

父はリハビリセンターで数ヶ月リハビリをした。父は苦しいリハビリに耐えて退院を迎えた。

退院の日、ぼくは迎えに行った。テレビで見るように、看護師のみなさんが見送ってくれた。これからどんなにすばらしい日々が来るか楽しみだった。しかし、楽しい生活も最初の三日だけだった。

父が変わった。父が以前より何倍も何倍もイライラし、おこりやすくなった。

少しごはんをこぼしても、

「お前はだめだ。なんでそんなことするんだ。」と、細かいことにガミガミ言い、どなってくるようになった。次第にぼくは息がつまりそうになっていきイライラし始めた。学校に行っても、父の事が頭から離れず、イライラして周囲にあたることも多くなり、そんなことをしている自分にも嫌気がさしていた。もうどうしていいか分からなくなっていた。そして一度だけ我慢しきれずに父をなぐってしまった。中学二年生の夏休みだった。野球の遠征で、準備をしていた時だった。父は僕の着がえを入れる袋のむすび方でどなり出した。その時は特別長かったのでこらえきれず、

「うるせえ。くそ親父。」

と言ってなぐってしまった。そして、家を出て学校に着いた時、急に悔しくなった。父にではなく自分にである。父は半身が動かないではないか。どうしてなぐってしまったのだろう。どうしていつも通り聞き流せなかったのだろう。遠征後、いつものように家に帰ることができず、玄関で立ちどまっていた。「父が口をきかなくなったらどうしよう。」と思っていた。その時、玄関の明かりをだれかがつけてくれた。玄関を開けると、父がいた。ぼくは自然に「ゴメン。」と言っていた。「腹減ってないか、ごはんできてるぞ。」父のその言葉に、ぼくは涙があふれた。そして、心があたたかくなった。その時ぼくは「この父親を大事にしよう。」と決めた。

今では毎週父と海釣りに行っている。釣った魚を持って帰り、五人で楽しく食事をしている。

「五人そろって家族」そのありがたさを実感しながら毎日を過ごしている。ぼくは一生この家族を大切にしたいと強く思っている。